

馴窓の 歌ごころ

―物語・説話に喚起される―

岡田美也子

ご紹介いただきました岡田です。よろしくお願いいたします。毎回、大体、中世の話題を担当させていただいております。本日も中世の私家集を中心に話をさせていただきます。

今回のテーマは「歌ごころ」でありますので、まず「歌ごころ」とは何かについて確認をしておきたいと思えます。

資料の「はじめに」に「歌ごころ」という言葉の辞書的な意味を並べておきました。『精選日本国語大辞典』には、「①和歌の意味、和歌の内容、歌の心、②和歌に関する素養とか教養、③和歌を作ろうとする心、和歌の創作意欲、④歌にこめられた心情、歌唱の中にこめられた心情」とあります。

今回、四回の講座のうち、おそらく、私以外の講師の方々は、房総という土地が③④の意の「歌ごころ」をどう喚起したかについてお話しされるかと思えます。しかし、『雲玉和歌集』（『雲玉和歌抄』とも）に關していえば、③④といった主情的な「歌ごころ」を見るにふさわしい作品とは言えません。一方で、②「和歌に関する素養とか教養」に関しては、やや意味合いが異なるものの、非常に興味深い問題をはらんだ作品であるということが言えます。

副題に「物語・説話に喚起される」としましたのは、私の主な研究テーマとのかかわりを示しております。説話や物語といった散文と和歌のような韻文が創作という行為の中でどのように関係し合うのかというテーマです。中でも、説話が和歌や物語の世界の表現をどう取り込んでいるのかということを中心に考えてまいりました。ただ、実際の作品世界では、和歌と物語の交渉が盛んで、先行研究も多いのです。そこで、今回は、物語や説話が「歌ごころ」をどのように喚起するのかという問題に取り組んでみたいと思えます。

現代人が和歌や俳句を詠むときに先行の文学作品をふまえる、ということはあまりないのではないかと思います。自分が直接、物や人に触れて感じたことや情景を詠む場合が多いでしょう。しかし、古典では先行作品を自分の作品にどのような形で取り入れるかという課題が、和歌の技能という意味でも非常に大きな位置を占めていました。

その代表的な技法は、本歌取といって古歌をふまえて和歌を詠むものです。このほか、本説取あるいは物語取といって、漢詩文や物語といった散文作品の内容や表現を背景に和歌を詠むという技法がございました。物語や漢詩文の、ある場面の字句を取り込んで、その情景や心情を歌の背景におくことで、その物語世界と和歌世界が二重三重写しになって、歌に深みを与える、そのような詠み方が志向されたわけです。これらの技法が歌の芸術性とかかわりにおいて意識されて、その時代の歌風を形成するのに大きな役割を果たしたのは、平安末期から鎌倉初期にかけて、藤原俊成や定家の頃でした。特に物語への意識は非常に強いものがありまして、『伊勢物語』や『源氏物語』、また『源氏物語』の後継作品ともされる『狭衣物語』が非常に重視されていきました。

今日お話しいたします馴窓とその周辺の歌人たちもこの流れを汲みながら、物語のふまえ方という点ではやや異質なものがみられます。今回の講演では、その変化をたどることまではいたしません。散文と韻文の世界の融合という創作上の課題を考えるために、馴窓の『雲玉集』は、非常に興味深い様相を呈しているということを申し上げておきたいと存じます。

それでは、前後いたしました。今日取り上げる『雲玉集』とその作者である馴窓について改めて御説明いたします。資料一「作者と作品」を御覧ください。

まず、奥書に「永正十一年四月六日 作者 納叟馴窓書之」とあるので、成立年が西暦でいうと一五一四年、作者は「とつそう」あるいは「のうそうじゅんそう」という人物であることが分かっております。

『雲玉集』には、その馴窓の自詠と人麿・家持ら万葉時代から為尹や孝範など室町中期までの歌人の五九八首が収められています。しかし、そのうち自詠は二〇〇首足らずで、中には漢詩や発句を含んでいるので、本人の和歌は約三分の一しかありません。そして、辞典の解説に、各歌にまつわる説話・注釈および自詠にも自注めいた記事が付されている。私撰集または和歌説話集的な内容であるが、これを創作のための所為とみれば、特殊な私家集ということができるといえる。

『和歌文学辞典』『雲玉和歌集』の項 有吉保氏執筆）とあるように、それぞれの和歌に注の形で物語や説話が付されている、それによって和歌の背景や根拠がある程度たどることができるのが大きな特徴です。しかもその説話や物語が他に知られているものと微妙に異なっていたり、他に見られないものであったりしますので、そう

した伝承の一端を知る資料としても興味深い作品であるわけです。

今回は、有吉氏が「創作のための所為と見れば、特殊な詩歌集と言いうことができる」と指摘されている点に注目したいと思います。つまり、自分がどういう背景でその歌を詠んだのかとか、歌人である自分がどういいう知識を持っていて、どういう人たちと交流があるかということの説明しつつ、ある意味、自分の創作過程をさらけ出している点です。そういう意味で、今回の全体テーマである「歌ごころ」ということを、ある程度、本人の意識から探ることのできる材料と言えるかと思っております。

馴窓については、出自や経歴の詳細など不明点ばかりです。ただ、資料の四角で囲った『雲玉集』仮名序の本文を見てみますと、おおよその経歴がわかります。

平のながしと申したてまつりて弓馬の家にすぐれ、威を八州にふるひ、諸道に達して政を両総にをさめ、中にも大和歌にこころをよせて佐倉と申す地にさきくさのたねをまき給ふ、誠に桓武の御すゑ、平安のみやこをあらためたまひて、此所天ながく地ひさしと見えたり

ここまでは、馴窓が身を寄せた千葉氏一族の一人、千葉勝胤ではないかと言われている人物の説明で、次のところから自分自身について述べています。

ここに又ほうけつきたる世すてもものあり。若年の比武州江城辺に星霜をおくりしが、秋風たちて露のみだれにむさし野をまよひいで、老年におよび、貴命懇志のあまりに三四ヶ年の春秋をかの地になくさみ、節の一つぎ月の歌合のよすがばかりや、愚歌しるし奉るべき

必ずしも文芸上で切り離されるものではなかったのではないかという指摘があります。彼らの交流は、文化的な次元でのつながりということに注目されているのです。

ようやく本題に入ります。『雲玉集』の中で和歌が物語や説話の世界とどうかかわりあっているかという問題について、三つの枠で御紹介してまいります。一つ目に「本説取―土地の伝承」、房総の伝承を元に和歌を詠むという場合。二つ目に「本説取―自注としての引用」、注に物語を引用しながら歌の心について解説している場合、三つ目に「考証の素材として」ということで、散文作品の一部を引用しながら語義などを考証している場合です。

まず、資料の二「本説取―土地の伝承」を御覧下さい。テーマが「房総と「歌ごころ」」ですので、直接に房総にかかわるものを挙げておきました。平成十四年の講座で取り上げた話題ですので、もしご参加いただいた方がいらっしゃいましたら重複いたしますが、ご了承ください。

最初に挙げましたのは、馴窓が本佐倉の地で過ごしていた証左としてよくとりあげられる和歌です。現在の京成佐倉駅近くに海隣寺というお寺がございます。海隣寺は、観応三年（一三五二）に千葉氏によって造られて、その後千葉氏の移動に伴って文明十六年（一四八四）以降に酒々井に、さらに天正年間に今の佐倉市海隣寺町に移転いたしました。資料に掲載したのは、この海隣寺の歌会で馴窓が詠んだものです。番号は新編国歌大観の歌番号です。

御建立の道場にて御会当座の歌に、池蓮を申せし

にごりにはしまぬはちすの糸なれど猶色色にそめどのの池

御本寺当麻にそめ殿の池あり、曼荼羅のはすの糸五色にそめ

られし池なり

(一七三)

海隣寺は、時宗当麻派の寺でして、当麻寺には当麻曼陀羅というのが残されていて有名な中将姫伝説がございます。当麻寺で出家した姫が阿弥陀如来の姿を拝することを願って蓮の糸で曼陀羅を織ります。その姫の気持ちをおくんだ阿弥陀と観音が尼と織姫に姿を変えて手伝う。そして、姫が十数年後に往生を遂げる。馴窓の歌は、海隣寺の本寺である当麻寺に伝わる中将姫伝説をふまえながら詠んだものです。

次の三三〇番から三三三番の歌は、海隣寺建立後初めての歌会で詠んだものです。

海隣寺御建立之始ての御会に、山寺早梅を申せし

あけにけり年をもまたで玉匣ふたかみ山の窓の梅が香

彼御道場は当麻末寺なれば二上山を申して候、中将姫此山

に草庵し給ひ、正身弥陀来迎なくは必命を期とせんとて念

仏三昧に入る、寥寥たる窓の前に月の光にさしあらはれて

老尼一人来給ふに、あやしみおぼして、中将姫の御歌

南無阿彌だ仏のみぞよぶこ鳥あやしやたれぞ二上の山

あま、返し

二上の雲ちはるかによぶ声をしるべに分けし山窓の月

本覚常住月輪、弘無明煩惱雲なり

(二三三〇～二三三二)

この歌は、「玉匣」つまり整理箱の縁語である「蓋」と「二上山」を掛けていますが、左注に「彼御道場は当麻末寺なれば二上山を申して候」、つまり、海隣寺が当麻寺の末寺なので二上山を称していると

説明しています。その続きの「中将姫此山に草庵し給ひ、正身弥陀来迎なくは必命を期とせんとて念仏三昧に入る」からの後の部分が中将姫伝説になります。姫が二上山に草庵を編んで、生身の阿弥陀如来の御来迎を得たい、それまで命の限りにという覚悟で念仏三昧に入ったのです。すると、あるとき、窓の前に月の光が差し込んで老尼が一人現れた。どうしたことかと思いつつ中将姫が詠んだ歌が三三一番の「南無阿みだ……」の歌で、「ただ阿弥陀だけをお呼びしていたのに、不思議なことにとどながいらしたのであろうか」というものです。それに対して尼が返した歌が三三二番歌「二上の……」、「中将姫の阿弥陀を呼ぶその声を印としてやって来ました」ということですね。

馴窓の歌の第五句には「ふたかみ山の窓の梅が香」と「窓」が詠み込まれていますが、このときの歌題は「山寺早梅」でして「窓」は必ずしも詠む必要のない素材でした。これは、中将姫伝説の中に「寥寥たる、窓の前に月の光にさしあらはれて」老尼が現れたとあって、「窓」がポイントになっているということをおまえながら、すなわち、馴窓が当麻寺の縁起を思い浮かべながら詠んだことを示しています。

この中将姫の伝説は、古くは『当麻曼陀羅疏』や『当麻曼陀羅注記』、あるいは『私聚百因縁集』といった十三世紀代の書物に見られます。しかし、「中将姫」という呼称が見られるのは『当麻曼陀羅疏』という当麻曼陀羅の注釈書のみで、ほかは「中将内侍」となっております。一方で、その『当麻曼陀羅疏』には、中将姫や尼の和歌が出てきませんので、馴窓が『当麻曼陀羅疏』そのものを参照したかというところは、定かではありません。この書物を土台とした別の形の物語を見た可能性もある。もしかしたら、佐倉の地でさらに膨らんでいったものかもしれません。

『当麻曼陀羅疏』は、西誉聖聡という浄土宗の僧侶が永享八年（二四三六）に編んだものです。興味深いことに、この聖聡という人物は千葉氏の出身なのです。聖聡は、馴窓や勝胤の時代からさらに遡って正平二一年から永享二二年、西暦で言うと一三六六年から一四四〇年に生きて、俗名は胤明と言いました。当初は、現在の千葉寺で密教を学んでいましたが、茨城の横根談義所で聖罔という人物に感化されて浄土宗に帰依し、宗義を学びました。その後、武蔵において増上寺を創建し、布教活動をおこなっていました。移転して今は芝にありますが、当時は赤坂から麴町の一带にあったということで、ちょうど本学の紀尾井町キャンパスのある辺りではないかと思えます。

馴窓が一時期、武蔵にいたという事実も勘案しますと、聖聡がまとめた『当麻曼陀羅疏』に類するものに馴窓が触れる機会があった可能性は十分に考えられます。あるいは、千葉氏を介して中将姫の伝説が佐倉周辺に伝わっていた可能性もあるでしょう。

以上のように、この海隣寺にまつわる歌は、説話が媒介となってその土地が歌人の「歌ごころ」を喚起した例ということになります。ただ、馴窓の場合、その素材が非常にマイナーな作品・逸話である場合が多いので、彼の教養の全貌がにわかには分からないというのが正直なところですね。また、『雲玉集』には、房総の地名等がよく出てきますが、直接、房総に伝わっていたらしき伝承や千葉氏にかかわる伝承というのが意外にありません。

配布資料には挙げておりませんが、例えば「矢指の浦」という歌枕が出てきます。これには、頼朝が九十九里に来たときに、矢を一本ずつ刺してその長さを測ったゆえに矢指というのだという地名伝承がありま

す。主人公がヤマトタケルや八幡太郎義家になっている場合もあるので、かなり知られたお話であったのではないかとも思いますが、馴窓が詠んだ矢指の浦の歌にはそういったことが少なくとも表面上、全くうかがえないし、注もないという状態です。

次の「くるとの浜」という地名も同様です。この地名は、古くは『更級日記』に上総から上京する途中の地名として出ていますが、これもやはり『更級日記』の「さ」の字もうかがわせないような詠み方になっています。歌の背景に何らかの伝承がありそうではあるのですが。

そのようなわけで、残念ながら、房総が喚起した馴窓の「歌ごころ」という意味での具体的な材料は、海隣寺の二首しかありません。そこで、馴窓が知っていたということとは、同様のお話が房総に伝わっていたのではないか、房総の歌人たちは理解していた物語とはこういうものだったのではないかという観点で、他の材料を見ていきたいと思います。

資料の三を御覧下さい。本説取ということで、自分の詠んだ歌の注釈として物語を引用する、あるいは、物語のある部分に触れるといった例がいくつも見られます。説話についても挙げるとかなりの量になってしまいますので、ここにはよく知られた物語だけを挙げておきました。

まず、『源氏物語』について見たいと思います。『源氏物語』は先に申し上げたように、いわゆる本歌取や本説取が技法として確立されていく中で最も重視された作品であって、馴窓にもこの『源氏物語』を土台にして詠んだ歌が見られます。六一番歌は須磨・明石巻、それから三二八番は絵合巻をふまえた歌です。また、三四八番は空蟬と軒端萩の物語で、両方とも名前が明示されているので典拠は明らかです。三六五番には源内侍のことが出てまいります。例として三二八番を御覧いただきます。

早梅薫月といふ事を

うつりきて月もあかしの浦風にほふかつらの梅の花ぞの

源氏のあかしのうへは、かつらにうつらせ給ひて、冬のそのをしめ給ふとなれば、とり合て申すなり、心詞かなふべくや

(三二八)

源氏が桂の邸宅を整備して、明石の上を明石から桂に呼び寄せる。そして、六条院の冬の園に住まわせるというように、明石の上になつわる一連の場所を詠み込んだ歌ということがいえます。

題「早梅薫月」に月が入っていますので、それを詠み込みつつ、明石の「あか」と月が「明るい」を掛けています。そして、明石の浦から桂へという語が導きだされて「かつらの梅の花ぞの」と詠んでいます。穏当と言えば穏当ですが、物語そのままではなく、一つの情景に詠み変えているという意味で及第点といえるのではないのでしょうか。俊成や定家の目指したものに比べるとやや平凡ではありますが、それなりの出来かと思えます。

『源氏』をふまえた歌に關しましては、いずれも、この三二八番と同じくらい簡単に、依拠した箇所と自詠の趣旨を左注に説明しているだけで、非常に淡白で素直な記述になっています。その物語そのものの内容や背景にこだわって長々と記述することはありません。『源氏物語』が俊成や定家の頃にこういう技法の中心になってきて、それがある程度確立されてきていることと関係しているかもしれません。また、非常に有名な作品であって、そういう意味で解釈にあまり極端な異説がないというところもあるかもしれません。もちろん、細部についての注釈はいろいろ

ろ作られましたけれども。

それに対して、『伊勢物語』や『大和物語』といった作品については、当時の関東地方にどのような物語が伝わっていたかということと少ししかかわる要素が見られます。

『伊勢物語』や『大和物語』については、不思議なことに『源氏物語』と違って、本説取という形では明確な例が見られませんし、自注、すなわち、自分の歌に対する注の中に引用する例もありません。しかし、他者の歌に対する注のなかで、この歌はどのような意味があるとか、異説がある、といったことを考証する中に見られます。したがって、項目三に挙げるのはあまり適当ではないのですが、同じ物語の享受ということでも挙げておきます。

まず『伊勢物語』に関して。

秋かけてふりしくこのはいくかへりむなしき春の色にもゆらん

これも、秋かけていひしなごらにて、契といふ字のあつかひ

あるや、此伊勢物語の此段、歌の心、世上の義ただしからぬ
にや、注ども見及ばじ

(三四五)

「秋かけて……」は、「契経年恋」という題で詠まれた定家の歌です。馴窓は、この歌が『伊勢物語』第九六段の歌を本歌としていることに基づいて、題の「契」という意味が第一句に込められているか否かということ、その歌が題詠の趣旨を表現しているかということを確認しているのです。

『伊勢物語』九六段は、次のような物語です。男がある女に長らく言い寄っていたところ、そのうちにその女性も男をいとしく思うようにな

りました。しかし、女は、夏で体におできも出来てしまったため、秋になってからお会いしましょう、と男の元に言って寄こします。ところが秋になってから噂が立ったことから、女の兄が女を引き取りにきてしまします。そこで女は、「秋かけていひしなごらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけれ」、すなわち「秋になったらお会いしましょう」とお約束したとおりにはなりませんのに、季節だけが秋になってしましました。あなたと私は、木の葉が散り敷いた江のように浅い縁でした」という歌の書置きを預けて去って行った、という物語です。

注意したいのは、先ほどの『源氏物語』の引用は自分の歌に対してこういう物語が土台になっているという提示に終わっていたのが、『伊勢物語』に関しては歌の心、つまり、世間に知られている意味合いや趣旨が正しいかどうかということを検証しようとしているという点です。さらに、『伊勢物語』には多くの注釈書が作られているわけですが、「注ども見及ばじ」ということで、それを確認したい気持ちをも表現しています。

次の『大和物語』についても、『伊勢物語』と同様に、本説取の例や自注での言及は見えません。一方、一般的にみて、『伊勢』『源氏』『狭衣』の三つの作品は、詞書や左注、歌判にもよく言及されるのですが、『大和物語』については、その書名が提示された上で論評が加えられるという例が意外と少ないのです。所収話には伝承としてよく知られたものも多いのですが。

したがって、『大和物語』の享受としては、『雲玉集』に三箇所も引用している馴窓の態度は少々珍しいといつてよいと思います。

あさかやまかげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは

これ又古今の序にあれど心得がたく、おほきみのおくへくだり給ふに国の司どもおろかに申すとて、京より勢をめしよせ退治せんとおぼす時、うねめのよめる心は、山の井はちいろにふかけれど人のかげさへうつればあさく見ゆる、そのごとく君をおろかには思ひたてまつらねど、えびすのならひには宮このやうのあつかひしらねば、おろかのやうなり、心にはふかく思ひ奉るをとよめるに、ことわりとおぼして大君の心とけにけるとなり、尤秘すべき事とや、大和物がたりは一向各別なり

(五〇〇)

「これ又古今の序にあれど」とありますが、『古今集』仮名序が第一句を引用した上で、割注に次のような伝承を伝えていきます。

あさか山のことばはうねめのたはぶれよりよみて「かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ事おろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさまじかりければ、うねめなりける女のかはらけとりてよめるなり、これにぞおほきみの心とけにける、〈あさか山かけさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは〉」

実は、この歌はもともと『万葉集』巻十六に収められていて、この伝承はその左注に語られていた伝承とほぼ同じものです。

また、中世から近世にかけて『古今集』仮名序に対する多くの注釈書が編まれたのですが、その中の一部も同様の伝承を記しています。

葛木ノ大君始テ橘ノ姓ヲ賜テ、始テ太政大臣ト成ル。奥州ノ守二成テ下リ玉フ時、近江ノ采女ト云女ヲ思テ具シ下ル。国ノモノ、

雑事悪シトテ、大二腹ヲ立テ玉ヒケレバ、采女土器ヲ取テ一首ヲヨミ大君ニサス。……(当該歌)……意ハ、大臣ノ人ノ雑事悪シトテ腹立玉フ、浅ク見ユル振舞ナリ。是ニナゴミ玉フ也ケリトハ、此歌ニモ深ケレドモ木葉散シクニ依テ、自然ニ浅ク成ル也
ハ何ニモ深ケレドモ木葉散シクニ依テ、自然ニ浅ク成ル也
これは、『古今和歌集序聞書三流抄』と言われる注釈書から引用したものです。「浅い」のは、国司の心ではなく、腹を立てた大臣の態度としている点が少し違うようです。

馴窓が左注に記していたのは、これらに近い伝承です。あるとき、大君が陸奥に下って行った際、その国の国司たちの待遇が粗略であったため、京から軍勢を呼んで、その一族を退治しようとした。そのときに采女が歌を詠んだ。山の井は本来深いものだが、人の姿が映ると水の水面だけのように、つまり浅く見えてしまう。同じように、陸奥の人々もその大臣を疎かに思っているわけではないのだが、田舎の荒々しい者であるために都の作法というものをあまりよく知らない。それで、帝に對して粗略な扱いをしてしまったようになったのであって、本当は帝のことを深く思い奉っているのですよ、という意味で詠んだ歌だということです。この采女の歌に大君はなるほどと思つて陸奥の人々を許したというのです。

馴窓はこの説を知つていて、「尤秘すべき事とや」、つまり嚴重に秘密にすべきことだと記しています。自分でも記録しておきながら妙な話ではありますが、実は『古今集』に関する種々の注釈は秘説として師資に相伝されるものでしたから、彼もそのような意識をここで表明していると思われまふ。

一方、馴窓が「大和物がたりは一向各別なり」とした『大和物語』一五五話は、次のような伝承です。大納言の娘が将来は帝の妻にと大切に育てられていましたが、あるとき、懸想した内舎人に拉致されて陸奥まで連れ去られて行ってしまいます。男は、安積山に庵をつくって娘を住まわせます。娘は、そのうちに妊娠しますが、男のいないときに山中の水辺で自分の姿を見たところ、かつて親にもかかずかれ、大切に育てられていたときとはあまりにも変わってしまった自分の姿、みすばらしい姿にショックを受けてしまいます。そこで詠んだのが先の「あさかやま」の歌だということです。娘は、この歌を詠んだ後に庵に戻って亡くなってしまう。非常に悲しいお話として語られているのです。

馴窓は、この二つの説のうち、『古今集』に対しては「心得がたく」とし、それがゆえに『大和物語』の伝承を考証の材料としてあげているわけです。

さらに項目の四「考証の素材として」にまいります。馴窓の歌「ころと物語の関係には他にどのような形があるのか。既に『伊勢物語』や『大和物語』でお話した類のものなのですが、今度は自詠に関する解説としてとりあげている例をみておきます。六九番が馴窓自身が詠んだ歌になります。

……落花とはちる花、三才嬰兒も知る事なるを、私の大事に
初花と心得てよむ事あり、いささか人に申さぬ事なり、古説
にも落英を喰食すと見えて菊の事なり、菊はちらぬなり、そ
の上菊を食するは盛の始を用ふ、広韻にも落は初なりと注せ
り、人の世を持初むるを落世といふ、祝言には文字の意し
らぬ人はいとふべき事なり

頼政、深山落花

みやま木のその梢ともわかざりし桜は花にあらはれにけり

此歌、詞花に題しらずと入りたり、撰者顕輔、同時の人に
て、いかで題しらざらんや、平家には深山花とばかりかた
る、かやうの事、秘するにやあらん、おつる花とよむは常
の事なり、花におつると心得て、いづれの木ともわかざり
しが、一花ひらきそむるをもて桜とするは初の心なるべし、
私相伝に山路落花を申せし時 衲雙

をりかざす袖しろたへにうちむれて桜におつるみよしののたき

これもちるにあらず、かざしゆくを見て桜は花におちつき、
たきはいつもたきとなり、袖しろたへなれば、よしのの袖
の滝に余情あるべし、かやうの事、道学の二にたちいら
ずして心得がたかるべし

(六八〜六九)

「をりかざす……」では、「桜」、「おつる」という言葉が出てきてい
るのですが、『平家物語』に触れています。

「落花とはちる花、三才嬰兒も知る事なるを、私の大事に初花として
心得てよむ事あり」。落ちる花、落花と書けば、それは散る花のことで
あるのは三歳児も知っている。しかし、「私の大事」すなわち芸道に
おける秘伝や秘事のことですが、その中に、「落花」を「初花」、咲き始
めの花として詠むことがあるということです。さらに、「古説にも落英を
喰食すと見えて菊の事なり、菊はちらぬなり。その上菊を食するは盛の
始を用ふ」、つまり菊の「落英」つまり落花を食すとある用例をあげて、
菊は散らない花であるし、もつとも花盛りの初めの頃のものを食べるの

だとしています。また、中国の韻の説明書である『広韻』の注もあげて、「落花」が咲き始めの花を指すことの考証を行っています。

証左として用いている「みやま木の……」は、『平家物語』の中に引用されている頼政の歌でして、「深山落花」という題によって詠まれています。山奥深く生えている木はどの梢がどの木のものか分からないものだが、桜は咲いたその花で明らかにそれと分かる、ということですね。

馴窓は、この歌に関して、『詞花集』には「題知らず」として入集しているが、撰者の顕輔は同時代の人であるから、題を知らないことはなかったろう、と述べています。また、『平家』には「深山茶」とだけあるのは、「落」すなわち「初」の意味合いをあえて隠したのだろうか。「おつる花とよむは常の事なり、花におつると心得て、いづれの木ともわかざりしが、一花ひらきそむるをもて桜としるは初の心なるべし」。つまり、頼政の歌は、「落つる花」という題でありながら、咲き始めの花を詠んでいるではないか。つまり、「落つる花」というのは散る花ではなくて、咲き始め、初花を言うのだと記しています。頼政の歌を落花イコール初花の証歌として用いているのです。

そして、私はこれらをふまえて「山路落花」という題で「をりかぎす」の歌を詠んだのですよ、と説明しているわけです。「これもちるにあらず、かざしゆくを見て桜は花におちつき、たきはいつもたきとなり、袖しろたへなれば、よしのの袖の滝に余情あるべし」と。「かよふの事、道学の二にたちいらすして心得がたかるべし」と。

最後の一文について、内容の詳細は分かりません。馴窓という人が和歌の教養においてどういう立場の人であったのか不明ですが、「私の大事に」、「私の相伝に」、あるいは「道学の二にたちいらすして」とい

う言葉から見ると、何か秘説を知る立場、あるいは秘説を伝えられる立場にあったのかもしれないと考えています。

これは当時の歌壇の状況ということも密接にかかわってまいります。俊成・定家たちによって和歌の黄金期新古今時代が築かれたあと、和歌の世界は徐々に下降気味になっていきます。貴族層の衰退に伴って和歌が貴族たちの自らの文化を守るための一つの道具になっていて、いささか硬直化したものになっていました。その中で、秘説とか秘伝といったものが作られていって、それを伝えていくことが歌人たちの一つのプライドのようになっていくわけですね。その一つとして「古今伝授」というものが発生します。これは、『古今集』中の語句に関する解釈や関連する分野の諸学説を口伝や切紙、あるいは抄物によって師からこれと見込んだ弟子に秘説として伝えるものです。これは、実は千葉氏の出身常縁が確立したものでありました。

やや先走りますが、資料の最初に引用した辞典の記述に「宗祇・兼載・正広・常縁・道灌らとも面識があり、特に孝範とは親密な友人関係にあったらしい」とありますが、例えば、常縁や宗祇、そして『当麻曼茶羅疏』を編んだ聖聡といった人々はみな、「古今伝授」や「古今集」注釈書の相伝に何らかの形でかかわっている人です。よって、馴窓も、そういう人たちの伝えてきた歌学の秘説を聞ける機会があったのかもしれない。先にみたような、一般に知られている物語の異型や、一般的には理解しがたいような語句の解釈などです。

逆に彼自身の「歌ごころ」、詠作という点で言えば、そういう秘説を知っている自分、自分が知っている秘説を表現する一つの場として歌というものがあつたのではないか。叙情的な「歌ごころ」というより

も、もしかしたら学問的なプライドの表現の場として、歌というものがあつたかもしれないという気もいたします。ペダンティックと申しましようか。

もう一つ同様の例をみておきます。

兼載と申す当代連歌宗匠の歌とて人のかたり申す歌に、花盛といふ題にて

月ならば秋のなかばの十日あまり五夜ばかりにさける花かな

盛の字に心をめぐらしてよめるばかりにや、無心の無心の歌なり、歌は有心無心無心有心しかるべし、二夜百首の内

に、花盛のこころを申し納叟

おなじくは我もみそちの春にして見ばやひさしき花の心に

老後なれば壮年の春を思出でて申せしなり

……(中略)……

古今の歌に、題しらず、よみ人しらず

春霞たなびく山のさくら花うつろはんとや色かはり行く
此歌、ある注に、延喜天子南殿の花を見給ひてとかけり、此義不叶や、新古今序に、古今においては当代の御製をのせず、後撰よりしてその時の天章を加ふと侍り、恋などの中には、かくして入りたるもあるべき、下旬にうつろふといふ事、色のかはる事なるに重説にきこゆ、古人の歌かやうの心得大切なり、私義には、北山の桜を業平をりて小町に見せ給ひし時よめるなり、女は物ごとにうたがひのころあれば、桜はさかりなれば山のかすみにうつろふは色かはるらんとや、そのごとく我にあだなる心を見せて、うつ

ろはんとの心やとよめる歌なり

(八六、八七、九〇)

八七番の「おなじくは……」が題「花盛」を詠んだ馴窓自身の歌です。

『雲玉集』序に「老後なれば壮年の春を思出でて申せし」とありますので、佐倉に来てこの歌を詠んでいるときはもう老年です。「みそちの春」、三十歳の春であれば、また花の見方も違うだろう、花盛りを自分の盛りと重ね合わせて見られるときであつたら良かったのといふことを詠んでいるものです。自分の歌が八七番で、間に八八、八九番の二首がございますが、九〇番にまた自分自身の歌の説明として『古今集』の歌を取り上げています。

「春霞……」は、『古今集』春下の六九番の歌で「題しらず、よみ知らず」となっています。この詠歌の場面について馴窓は、二つの説を紹介しています。一つは、傍線部、延喜帝が紫宸殿の南庭に橘と並んで植えられた桜を見てお詠みになったものという説です。もう一つは、「私の義」以下ですが、北山の桜を在原業平が折つて小町に見せた時に詠んだ歌としています。

一つ目の説に関しては、資料五ページの上段に挙げましたように、『雲玉集』の研究をされている徳田和夫先生の論文(「室町後期の説話とお伽草子―雲玉和歌抄」を繙いて)『国語国文論集(学習院女子短期大学)』一六 一九八七・三)に『古今為家抄』にある、と指摘されています。今回はこの書物全体を読む時間がありませんでしたので、実際は確認できておりません。

『古今為家抄』は、二条家流の『古今集』の注釈書です。御子左家は俊成・定家の息、為家の後に二条家、冷泉家、京極家に分かれますが、

特に二条家と京極家がそれぞれに自説を打ち上げつつ対立していきま
す。その中で、二条家の説を汲んだ注釈書として読まれているもので
す。『為家抄』とありますが、為家を書いたものではないことは明らか
で、ある一本については一五世紀末、明応元年（一四九二）以降の成立
とされています。諸論があつてすべてを整理することができておりませ
んが。

ほかにも同様の説があるかどうか『古今集』の注釈書をいくつか繰っ
てみたところ、次のような記述が見えました。

・ 此歌ハ南殿ノ桜ノ散ガタナルヲ御覧ジテ、延喜御門ノ御歌也。

歌ニ義ナシ（鷹司本古今抄）

・ 春霞の歌は、南殿の桜の散がた成を御覧じて延喜の御歌也。歌
に無義（為家抄混入注）

・ 読人不知、こ、は小町。但、家集に無之。…… うつろふと
いふ事は、うちまかせては、色のへんずる也。此歌にては、落
といふべきかと思へたり。（宮内庁本古今抄）

したがって、馴窓は何らかの形でこういつた説に触れていたように
あると思われます。また、『宮内庁本古今抄』では「読人不知」とする
一方で、「こ、は小町。但、家集に無之」と小町の名前を出しています。
『雲玉集』のもう一つの説との関連が気になります。業平の名前が出て
くる説は確認できなかったのですが、『古今集』の注釈書は、その書目
だけで一冊の本が出来るぐらいの本がありますので、あるいはそのどれ
かにあるかもしれません。

申し上げたいことは、このように、馴窓は、御子左家から派生した
二条家を始めとする歌の家に伝えられた和歌の秘説といったものを知り

得る立場にあつたかもしれないということです。

次の例は顕著なものです。『阿古根の浦』という言葉をめぐるの
やはり考証です。

万葉の歌に

わが思ひし野鳥は見せつ底ふかきあかねの浦の玉ぞひろはぬ

阿古根の浦、いせなり、いもせの契に秘する詞なり

（三五六）

非常に短いのですが、『万葉集』の「わが思ひし」という歌に出て
くる阿古根の浦は、伊勢にあるという説です。これについて「いもせの
契に秘する詞なり」としています。この阿古根の浦に関しては、いわゆ
る「古今伝授」等の秘説の中に特別に「阿古根浦口伝」という別伝とし
て設けられていて、三五六番の左注の説はその内容と共通しています。

阿古根浦口伝

天命勢尊・国命尊、阿古根浦にて天降給ひし道伊女命・勢夫命、
安智苑の海にして嫁して御子たちをうみて夫婦の道絶えずして人
の命を継ぎ、しやうじて心をいさむる道なり。

歌に云、

今こそは伊勢の契もはじめつれ伊勢の契は末ひさしかれ

……中略……

今、この阿古根の浦の口伝は、高貴大明神、在中將にさづけた
まひしよりこのかた、二条の家の重宝なり。他家に不及秘事歟。
この奥儀を聞く事ありがたきなり。

（「玉伝深秘卷」）

「夫婦の道絶えずして」云々、つまりいもせの契の意味を込めた言葉

であるということが述べられています。それから、場所については複数の説がありますが、特に「今こそは伊勢の契もはじめつれ伊勢の契は末ひさしかれ」として伊勢であることを強調しています。

『玉伝深秘巻』という書物も『古今集』の注釈書の一つです。こうした内容は、秘伝と言いながら、もしかしたら少しずつ部分的に広がっていたところもあるかもしれませんが。そういう意味で言えば、秘伝というのがどういふものであったかというのを考え直す必要も出てまいりますが。秘伝であれば、馴染がそういったことを知り得る何かルートがあったということになるかと思えます。

最後に、五番目の項目「伝説の記録（話そのものへの興味?）」とした点については、馴染が引用した伝説をそのまま掲載すると非常に長いのと、実はあまり自詠と直結しないものですから本文を挙げておりません。歌「ころ」ということは別としまして、話そのものに対する興味から記したと思われる物語や伝説が『雲玉集』の中にはたくさん含まれております。その中には、逆に『雲玉集』が謡曲に素材を提供しているという場合もありまして、この作品はマイナーでありながら、室町期以降の中世の文学に非常に大きな影響を与えている作品であるということも指摘されています。

さて、まとめです。房総と「歌ころ」という意味で言えば、『雲玉集』に直結する話題は少ないのですが、房総や武蔵野を中心として馴染のめぐった関東の地に伝わっていたさまざまな秘説が、彼の「歌ころ」をかき立てるものになっていった可能性があるということをお話しさせていただきます。ただいたつもりであります。

実は、そういった、特に『古今集』の古注釈や秘伝と言われる古注

釈の中身は、前々回お話をしました山辺赤人と人麻呂の同一人物説も伝えているものでありますので、房総地方の特に下総と上総北部辺りの文学状況を理解する上で、『古今集』の注釈書をもう少し洗い出していかなければならないのではないかと思っています。以上であります。

『雲玉和歌集』の背景の一端をお話ししまして、以上で終わりにさせていただきます。

【進行】 岡田先生、どうもありがとうございます。時間がもう少しありますので、ただ今のお話に対する質問、あるいは関連したコメントでも結構です。いかがでしょうか。ございませんか。私のほうから一つだけお聞きしてよろしいですか。

この馴染の『雲玉和歌集』のような私家集は、やはり珍しいのでしょうか。中世の歌集としても。ほかのもので似たようなものはありますか。

【岡田】 珍しいと思います。例えば勅撰集や私撰集などの注釈書はたくさんあります。しかし、自歌を三分の一も採る一方で、他人の和歌やそれに関するエピソードや背景説明もそれ以上の力の入れようで取り込んでいる。また、さつき申し上げたようにそういったものが連想によってつらなっていて、「あ、そういうえばこういう話もあった」というようにして、かなり長い説話が入っていたりする。こういう作品は他に見当たりにません。

【進行】 博識な人だったのですね、この人。

【岡田】 そうですね。博識かつ、それを表に出したがるというか。『古今集』の注釈という意味で言えば、かなりの説話とか異説を盛り込んだ書物はかなりの数あるわけですが、一応、秘伝ということになっており

ます。そういうものの内容も一部知っているらしく、自分の歌集の中にこれだけいろんなものを盛り込んでいったということは、博識でもあったし、それを表に出すという、少々特異な人物というイメージです。

【進行】 ありがとうございます。『雲玉和歌集』という名前は知っておりますが、手元にある普通の百科事典や辞典には馴窓も『雲玉和歌集』も案外出てこないんですね。これはかなり専門的な内容ではないかと思ったのですが、今回のお話によれば研究自体がまだそれほど進んでないということなので、今後研究が進むことを期待したいと思います。

(おかだ みやこ・本学国際人文学部国際文化学科准教授)